

「橋の日」の制定・活動と 47都道府県橋の日運動の支援

森田 千尋 正会員 宮崎大学 工学教育研究部 教授

きょう、何本の
「橋」を渡りました？

これは、宮崎「橋の日」実行委員会のパンフレットの表紙に書いてある言葉である。私たちの生活の中で当たり前に使っている橋、その重要性や橋の文化性を再認識し、橋に感謝する「橋の日」イベントが全国各地で行われている。

私は構造工学、橋梁工学、維持管理工学などを専門としている。宮崎大学に赴任して5年がたつが、赴任するまで「橋の日」の存在、宮崎県が発祥であることは、恥ずかしながら全く知らなかった。その私が現在は、宮崎「橋の日」実行委員会の副会長を仰せつかつており、反省の意味も込めて「橋の日」を紹介したい。

「橋の日」の提唱

「橋の日」は今から36年前、1985年に宮崎県延岡市出身の湯浅利彦氏が提唱した宮崎県発祥の記念日である。湯浅氏は子どもの頃、自宅近くの大瀬川で近所の仲間と魚を捕ったり泳いだりと、毎日カッパのように遊んでいた。当時の川は、きれいな水が豊かに流れ、鮎などたくさんの魚が生息する楽園であった。そこには、台風のために壊れるひ弱な木造の大瀬川と、少し下流にはびくともしない頑丈なコンクリート造の安賀多橋が架かっており、その橋も子どもたちの格好の遊び場となっていた。このような環境で育った湯浅氏は、年を重ねるごとに「橋への熱い思い」と「感謝の

気持ち」が芽生えたのである。木造の大瀬川が流されて町が分断され、不便を感じた経験から、改めて橋の存在の大きさとありがたさを子ども心に教えられたのである。自身の体験の下、近年の社会や環境の変化に、川と橋に関心を持つ必要性を感じ「郷土のシンボルである河川とそこに架かる橋を通して、ふるさとを愛する心の高揚と河川の浄化を図ろう」と、1985年、日付は8と4を「橋」と読む語呂合わせから8月4日を「橋の日」に提唱し、1994年8月4日には「橋の日」が（一社）日本記念日協会から記念日として認定された。

「橋の日」の活動

提唱した翌年の1986年に湯浅

氏参加のもと、延岡市の大瀬川に架かる旧・安賀多橋で全国に先駆け「橋の日」活動が実施された。第1回橋の日まつりでは、「延岡の橋、今昔」写真展、早朝清掃、生花の装飾、郷土芸能保存会による踊り奉納、高欄に風鈴やバラソルを取り付けるなど、橋に感謝するとともに「橋の日」を祝う行事が多彩に行われている。

翌1987年には宮崎市の大淀川に架かる橋橋を会場として、第1回の宮崎「橋の日」が実施された。第1回宮崎「橋の日」のイベントは、ラジオ体操、橋橋・大淀川河川敷清掃、橋・河川学習、また、橋上より風船を放ち、橋に生け花を飾るといった行事であった。

この「橋の日」を継続的に実施するため、1988年に10人の委員で宮崎

「橋の日」実行委員会が発足している。現在では約50人の大所帯となり、さまざまな活動ができる団体となっている。実行委員会では、「橋の日」を盛り上げるため、毎年多様なイベントを企画している。8月4日の実施にこだわり、宮崎市では橋橋周辺の清掃はもとより、橋橋「橋磨き」、橋橋「打ち水大作戦」(写真1)、橋への感謝を込めた献花、橋のパネル展、稚魚の放流などのイベントを行っている。規模を大幅に縮小して実施したのは、2010年の口蹄疫と昨年の新型コロナウイルス感染症拡大防止のときの2回のみである。このような橋の清掃のイベント

は、宮崎県内12市町で行われている。8月4日以外の活動も活発に行っており、シンボルマークの公募による作成、「橋の日の歌」の作成、福島邦成（私財を投じて初代橋橋を架橋した医師）没後100年パネル展開催、「福島邦成と橋橋」紙芝居作成、宮崎の橋101選ポスター作成など多彩なイベントを行ってきた。また、活動20周年を記念した「橋の日サミットinみやざき2006」や30周年での「橋を通じた地域づくりシンポジウム」を開催し情報を発信している。

最近では、防災・減災への架け橋として、宮崎では南海トラフ地震への備えが喫緊の課題であることから、350年以上前に宮崎を襲った大地震も題材にした紙芝居などを宮崎県と協働で制作した。この地震は被害の大きかった地域の名前から「とんとところ地震」と呼ばれており、地元ではこの地震のことを忘れないよう50年ごとに記念碑を立て、防災意識を高めている。制作した紙芝居、DVDおよび



写真1 橋橋「打ち水大作戦」(2011年)



写真2 「とんとところ地震」絵本の贈呈



写真3 鹿児島「橋の日」のスケッチ大会

全国47都道府県 「橋の日」運動の支援

絵本は、県内全小学校へ寄贈している(写真2)。

この「橋の日」イベントの全国展開は、1992年に奈良県十津川村の谷瀬のつり橋で始まった。湯浅氏および鶴羽浩事務局長を中心とした地道な努力により、2005年に釧路市幣鶴橋で北海道に広がり、2008年の長崎市眼鏡橋で九州の全県、2011年の那覇市明治橋で沖縄県、2013年には安道湖大橋と瀬戸大橋で中国・四国地方の全県、2015年には東北、関東、中部、関西に広がり、全国47都道府県全てで「橋の日」のイベントが

開催された。具体的な活動としては、東京「日本橋」や大阪「戎橋」でも打ち水や橋の清掃、他県では橋上太鼓演奏やスケッチ大会(写真3)、橋のライトアップなどを行っている。「橋の日」の幟旗を掲げ、かけがえない橋とふれあいながら橋に感謝し、人と人、地域と地域をつなぐ活動が全国各地で行われている。これらの活動の広がりが認められ、(一社)日本記念日協会より「記念日文化功労賞」を受賞した。

以上、簡単に「橋の日」を紹介したが、この学会誌が届く頃が第35回の宮崎「橋の日」である。橋に感謝しながら、8月4日に近所の橋を清掃いただければ幸いである。

(担当編集委員・出水亨)

MORITA Chihito

橋橋を対象とした構造解析、防食技術、健全度評価などの教育・研究、および橋梁点検技術者の人材育成に長年従事し、2016年6月から現職。2018年から宮崎「橋の日」実行委員会副会長。